

論文審査の結果の要旨

A Steady Increase in Nontuberculous Mycobacteriosis Mortality and Estimated Prevalence in Japan

日本における非結核性抗酸菌症死亡の増加とその推定有病率

日本医科大学大学院医学研究科 呼吸器内科学分野

研究生 森本 耕三

Annals of American Thoracic Society 第11巻 第1号(2014)掲載

肺非結核性抗酸菌症は臨床現場で日常的に遭遇する疾患であるが、長期予後は良好なものと認識されてきた。同症では、結核のように感染症としての報告義務はなく、本邦ではアンケート調査による罹患率の推定がなされてきた。申請者等は、同症の過去40年間にわたる死亡データを基にして、非結核性抗酸菌症死亡の推移、地域差、推定有病率を求め、疫学状況把握を行なった。非結核性抗酸菌症死亡は人口動態統計により、粗死亡率、年齢調整死亡率および標準化死亡比は国勢調査より計算した。また、2004年から2006年の間に結核予防会複十字病院にて診断、登録された肺MAC症患者309例を追跡研究し、5年間の死亡率を求め、WHOが用いる手法により2005年時における肺非結核性抗酸菌症の有病率推定を行った。死亡数は、1995年前後に分けて近似直線をひくと、男女ともに1995年以降に強い傾きが認められたが、特に、女性優位であった。粗死亡率は2010年0.870で、同様に女性の増加が明らかであった。年齢調整死亡率では、男性が2000年から減少に転じていたが、女性は上昇傾向を維持していた。地域別では、2010年の死亡数は南西部太平洋岸の県に多く、最も高かったのは高知県であった(1.92)。309例の臨床追跡研究では、全死亡率は10%/5年で、MAC症特異的死亡率は4.2%/5年であった。2005年の本邦における同症死亡数は832例であり、有病率は33-66/10万と推定された。この研究により、同症による死亡増加が明らかとなった。死亡増加の原因として、高齢化、医療側の関心の高まり、DNAなどを用いた菌同定法の開発、重症化する患者の累積が考えられた。地域差は、高温多湿であることが想定された。推定された有病率は諸外国からの報告に比して高く、人種要因も想定される。

第二次審査では、統計学的手法の妥当性、アジア推定有病率の状況、治療法との関係、既存肺病変との関係など、多岐にわたり質疑があり十分な知識をもとに的確な回答を得た。

本研究の結果は、増加する肺非結核性抗酸菌症の我が国における疫学状況把握を行なった貴重な知見であり、極めて価値ある論文と考えられる。以上より、本論文は学位(医学博士)論文として十分に価値あるものと認定した。